
干支 & 瀬兎ら

傍観者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

干支&瀬兎ら

【Nコード】

N0468P

【作者名】

傍観者

【あらすじ】

主人公：瀬兎無月（？）が、ヒロイン：猿酉乾（？）の創設した『十二支部』という部活のようで部活ではなく1周回ってやつぱり部活じゃない部活に加入させられるお話。個性豊かな部員？がいるかも謎。山があるのかも、落ちがあるのかも、展開があるのかも、笑いがあるのかも、感動があるのかも、全ては謎。なぞつたら謎。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - A（前書き）

- ・ 文章能力0、素人丸出し。
- ・ ラノベ調（であると願いたい）。
- ・ 語彙力が乏しい。
- ・ 部活系。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - A

『その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - A』

桜も散りに散ってチリと化した4月の最終日。

僕と彼女、瀬兔無月せとむつきと猿酉乾さるとりいぬいとの出会いの日であり、僕が巻き込まれる日だった。

自転車のベルを2個ほど装備した時計、通称では目覚まし時計が枕元で鳴き叫ぶ。

その鳴き声に夢の世界から現実の世界に呼び戻される。

マンガのように投げ捨てたり、手探りでアラームをきったりせずに半眼の状態で視認しアラームをきる。

理想は目覚まし時計ではなく幼馴染が起こしに来てくれることなのだけど……残念。

「はあ……」

僕の1日の始まりは幸せの放棄をすることだった。

何ともダメな人間だと自覚と自負はある。

体と意識を覚醒するためシンク口率を400%になるまで上げる。

端的に言えばボーとすることである――。

いくらか経ったのちに、枕元の目覚まし時計を見ると8時を10分ほど過ぎ去っている。

アラームの時間は7時に鳴るようにしているのだが、
謎。

「ふむ、遅刻だな」

などと、内心は余裕ぶっている。が、遅刻すると目立つのでちよいとばっか鬱^{ふさ}ってる。

「よつと」と公園の池でカップルがギーコーボタンとしてそんな船の名前を呼びながらベッドから起き上がる。

「ん？あれはボートか」と制服に着替えながら脳みそに訂正文を入れる。

ヨットって何物（当て字）？

制服に着替え終わり1階のリビングへと降りて行く。

「なんで起こしてくれなかったんだよ」

と、母親とのコミュニケーションのため起こしてくれなかったことに対する責任転嫁の定例文を言う。

「……………」

へんじがない　ただのむじんのようだ。

そうだった。

両親は時間を取ることに成功し遅い結婚記念日を旅行先で祝っている。

1つ年下で妹の卯月^{うづき}は友人宅でパジャマパーティー。

どちらも2泊3日。

そして今日は2泊3日の内の、1泊2日目に該当していた。

「忘れてた。てか、まだボーとしてるな」

言いながら食パンを焼き始める。

椅子に腰かけ、今日の学校のことについて思案。

「どうせ遅刻するなら1時間目の体育はサボタージュ使用」

『しよう』という決意と、「使用」というダジャレを思いついたの
で言ってみた。

「そもそも体育の授業は嫌いなんだよな。球技に関してはそれぞれの部活動をしている方々と1部の声の大きい方々が頑張り始めますから。はいはい、かつこいいかつこいい。しかも授業後には教室の床に良い臭い^{にお}のワックスでお掃除でもしたのですか、と質問したく

なるほどの匂いが立ち込めるわけだよ。まあ、皆さん青春してますから汗の臭いが気になっちゃて制汗スプレーをこれでもかとぶちまけていますからねえ。本当にありがたいことです」

おや、脳内で言っていたつもりが声帯の独断行為によって独り言になってしまった。

危ない危ない。声帯に注意を促さなければ。

などとかだらないことをやっていると食パンが焼けた。

教室の床にワックスを塗るかのように、制汗スプレーとは掛け離れた自然の匂いしかない無香料の自家製イチゴジャムを塗りつける。これでもかというほどに、『誰に』とは言わないがイヤミったらしく、ね。

イチゴジャムを塗った焼き食パンを咥えて道路を駆け出す。

「わー。遅刻、ちっこく」

50メートルほど駆け、角を曲がる。

するとそこには少女が歩いていて。

お互い止まらずに、主に僕が止まらずにぶつかる。

「わっ！」「きゃっ！」

僕は踏ん張りが利き転ぶことはなかったが、ぶつかってしまった少女は転んでしまった。

「ご、ごめん。遅刻しそうで急いで、たっ！」

少女を起こそうと手を差し伸べたら、目の前には少女がお尻をこちらに向けて四つん這いの状況だった。

スカートがめくれて乙女の秘密を守る水色縞々模様の守護者ガーディアンと目が合う。

目と目が合う瞬間好きだと気付いたワケではなく、もともと好きですたい。眼福眼福。

「いたたた」と言っていた彼女が自分の状態に気付いたのか急ぎ立ち上がる。

水色縞々模様の守護者との突然の別れ。

あー、ご無体なお代官様あ。

こちらに振り返り、もじもじと恥ずかしそうにする彼女。

頬を赤く染め下をうつむき、時折上目遣いで僕を見てくる。

この一連の動作を見ているだけで心臓の鼓動が早くなるのを感じる。それだけでなく彼女自身の存在で自分の顔が熱くなるのも感じる。

身長は160センチあたり。幼くも見えるがそこはかとなく色つばさや艶やかさを感じる少女。黒のセミロングを2つ結びにし、色・ツヤとともに指通りの良さをも見ただけで感じ取れる髪。見たものの瞳を引き付ける大きな瞳。定例文で申し訳ないがスツと通った鼻筋。ぷるぷると潤った麗しい小さな唇。全ての各パーツに職人技が見て取れる1級品。そしてそれぞれが活かし合うかのように顔の絶妙な位置に埋め込まれている。

初めてだ。人を見てこれほどまでに見蕩れたのは。呼吸を忘れるほど視覚に集中したのは。

なにより完全なる『美』を持った少女を見たのも。

「ああ、あの……、その……」

透き通った綺麗な声音には癒し効果あり。

マイナスイオンを擬人化してアニメ化したら声優はこの子で決定だな。

会話としては不成立な言葉を口にしたつきり唇を動かさない彼女は、はん、なるほど。ここは紳士としてレディのコミュニケーションをエスコートするべきだな。

明るめの声で相手を怖がらせないようにして、

「ごめんね、大じよ——」

「ごうごう、ごうごう、ごめんなさい」

と言いながら頭を下げて僕の横を猛ダッシュで消えてしまった彼女。エスコート失敗。何故か振られた気分になった。

出会いを開始してから会話が成立せずに僕の目の保養をし、人生初の告白に失敗た気分を味わっただけでお別れ。

しかしこれが僕と彼女との初めての出会いであり、始まりであった。

という妄想をしてみた。食事中なのに。

「まあ、多少の性癖は露見してしまったが、イチゴジャムを塗った焼き食パンを啜えるとは斬新。……うん、そうでもなかった。それに問題点もあるな。僕は自転車通学だから、この出会いは不成立だな。もし出会ったとしたら事故だよ、コレ。これぞまさしく、『出会い頭事故』。なーんてねっ」

これが言いたくて文章にして40行近い妄想をしました。

くだらない。我ながら全てがくだらない。

そして独り言の多い人間だ。

家にいると寝そうで、1時間目どころか学校をサバタージュしてしまいそうなので登校する。

家から学校まで自転車で約20分。

頑張り次第では12分前後。

橋を1つ渡り、心臓は破らないが足に乳酸を蓄積させるには十二分の坂を超える。

平坦な道を数分間走らせると学校に到着。

僕の愛すべき母校である私立城西学園しりつじょうせいがくえんに。

学校の外観は擬洋風建築の類似品。

中身はどこにでもある学校を思い浮かべればそれが私立城西学園である。

外見と中身がデスマッチ——……ミスマッチである。

ある意味でここの一画はマンガの世界に該当する。

そして僕の世界での非常識の1つである。

校舎だけの簡単な説明。

校門から見て2棟ある。

手前から職員・移動教室・文化部棟。

職員室に職員研究所、資料室、音楽室や理科室、文化部の部室などがある4階建ての棟。

次に教室棟。

1階に3年文系教室。2階に2・3年理系教室。3階に2年文系教室。4階に1年教室となっている。

そして何より、横に無意味にデカい。

玄関で上履きに履き替え廊下を歩く。

教室棟へと続く渡り廊下を歩く。

1年教室のある4階に行くため階段を上る。
階段を上りきる。

僕の教室である1・2に向かい歩く。

教室前に到着。

扉に手をかけて横にスライドさせ、無人の教室に入る。

.....訂正。

1人いた。

僕の机を本人の許可なく、本人の目の前で荒らしている女子高生が。あまりの予想も出来ない出来事に思考回路はショート寸前になった人間、咄嗟に起こることに對して本性が出る。

そんなことを持論として語ったこともあったなあ、と思いでポロリ。僕は思考が止まるらしい。

が、復帰は早い。

本題に戻るとして、この女子高生どうしようかな。

授業をサボタージュして人の机を荒らしている『人』になど関わりたくないというのが本音だ。

ほんとにどうしよう？

なんとなくだけどこれって分岐点だよね——僕の高校生活の……。そんな気がした、午前9時。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - B（前書き）

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - A
の続きです。

ヒロイン（予定）と主人公との絡みがようやく実現。

主人公がぶっ壊れてます。
ぱんつ。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - B

さて、この危機的状況にどう対処すべきか。
扉を開けた際に気付いてくれていれば強制イベントだとも思えた
のに。

不本意ながら選択肢を与えられてしまった。

逃げたい。この現実から、非常識から逃げたい。

出来るのなら図書室で本という非現実に目を向けて、この非常識か
ら目を背けたい。

否。

非現実にも目を向けても現実是不変ならないし、非常識から目を背けて
も現実是不変ならない。

結果的には変わらないしいずれは向こうから、女子高生ひじょうせいから向かっ
てくる。

じゃあ声をかけよう。

結果的に来るんだったら準備ができる今が好機じゃないか。

しかし、なんて声をかけよう。

第一声はかなり大事なはず。

第一声で相手に与える危機感が変わるといっても過言じゃない。

『何してるの?』

いや違う。もう少し上から目線で。

『人の机荒らしてんじゃねえよ!』

キャラ違う。第一人称が確実に「僕」じゃくて「俺」or「俺様」
だよ。もつと僕らしく。

『水玉模様が素敵ですね』

素敵ですけれども。僕に限りなく近いけれどもさ。

『縞々ならさらに良し』

柄違い発言。水玉も好きですけれど。

『クンカクンカしても良いですか？』

変態だよね。常識的にも非常識的にも変態だよね。

『ぺろぺろ』「無視すんな！瀬兎無月！」

怒鳴り声と言っているいいほどの大音声で、僕の机を殴る音とともに、フルネームで呼ばれた。

ひじょうしき
女子高生に。

準備段階で気付かれちゃった。

テヘッ（笑）。

ありがたいことに言っただけはいけないあの言葉は頭の中でも再生されずに済んだ。

止めてもらえて良かった。

ひじょうしき
女子高生の容姿について説明するなら一言で済む。

朝の妄想の子。

知らない人のためにもう一度頭に浮かべてみる。

『身長は160センチあたり。幼くも見えるがそこはかたなく色っぽさや艶やかさを感じる少女。黒のセミロングを2つ結びにし、色ツヤとともに指通りの良さをも見ただけで感じ取れる髪。見たものの瞳を引き付ける大きな瞳。定例文で申し訳ないがスツと通った鼻筋。ぷるぷると潤った麗しい小さな唇。全ての各パーツに職人技が見て取れる1級品。そしてそれぞれが活かし合うかのように顔の絶妙な位置に埋め込まれている。』

である。

違う点は髪の色が茶色であることと釣り目。

綺麗な茶色に、各パーツと調和してる釣り目でこれまた美少女。

補足説明として胸が弥生時代と現代を比べるほどの発展の無さであった。

妄想を90%現実にする力でも手に入れてしまったか、偶然見た彼女を脳内保管&修正したかで今後の生活が540度変わる。

前者でも後者でもなく、単純に自分の好み（妄想）に限りなく彼女

が近かったただけだろう。

さて本題に帰るか。

ファーストコンタクトは先手を取られて失敗に終わり、強制イベントとなり危機的状况に追い込まれたのは僕だった。

最悪の立ち上がりだ。

「で、結局いつからそこに突っ立てたの。それともまだ無視するの？」

強気に言ってくる彼女中心に物語が進もうとしてる。

「だんまりつてわけね。机を漁つてるところは見てるんでしょ？」

展開的にまずい。

これは僕が語り部であるべきだというメタ発言を試みる。

ここらで一発デカい不発弾的な不意打ちが必要だな。

「まあいいや。机に入れー」

「素敵な水玉模様だね」

「……っ！」

一瞬何を言ってるのか分からなかった彼女だが、スカートを押さえ、何故か弥生時代も押さえて顔を赤らめる。

ここでさらに畳み掛けるべし。

「5日前の縞々模様だったらさらに良かったんだけどなあ」

「ななな、ななんなんでワタシの5日前のパンツの柄知ってんのよ！」

もちろん5日前のパンツの柄なんて知らないし、5日前は彼女自身知らない。

今もだけど。

しかし言葉だけでは完全には勝てないので表情と行動でさらに優位に立とうではないか。

真剣に考えてるかのようにして顎に右手を置きながら彼女に近づき、「ピンクも捨てがたいけど、癒し効果のある水色が僕は好きかな。

ああ黄緑色も好きだよ」

笑顔で右人差し指を立てて好青年風変態の完成。

柄ではなく色に移り万人に対しての話をすることで相手のことを知らないことを悟られないようにする。

これぞ妙技。

またの名をコミュニケーション能力という。

冗談です。

コミュニケーション能力を持つ人はこんなことしないです。

何故か彼女より優位に立とうとしたら変な方向に進んでしまった。
自業自得です。

彼女の青ざめ寸前の引きつった顔を見て僕の発言がどれほどに常識人離れしているかが分かる。

いきなりパンツの柄が素敵とか、5日前のパンツの柄を言われたり、僕の好みのパンツの柄を聞かされたりすればこうなるのは当たり前なのだけでも。

さて、優位に立ったので先ほどのことは冗談だと言わなければ。
信じてもらえないだろうとは思っている。

だってほぼ真実だし。

嘘偽りがほとんど混ざってない純度の高い真実。

あの様子からして縞パン持ってるし。

しかも水色か黄緑色。

嘘をついたつもりが真実になってしまう。

オオカミが来たと嘘をついたらホントに来ていて村から感謝される
オオカミ少年。

僕の場合は確実に村八分されるけど。

おっと、本題に戻りますか。

「ははは、冗だ「しゃべるな!」「」

「いや、ちょ、話を「しゃべるなって!」「」

僕の話を書いてくれません。

やっぱりな。

「ちよつと考えるから、しゃべらずに待つてなさい！」

頭を抱えて目をつぶり、ブツブツと何か言っている。

残念ながら全文は聞き取れない。

『いいの？』『大丈夫？』と疑問形の言葉が多々聞き取れた。

まあ彼女の世界が形成されてしまっている以上待つしかない――。

「よし、オーケー！」

30秒ほどしてそう切り出した彼女。

「よろしでしょうか？」

「よろしい」

何故か上下関係が反転した。

「とりあえず完結的に言うと、机の中の封筒を見なさい。以上。それだけ。じゃあ」

片手を挙げ、教室の後ろのドアから出て行った。

一体なんだったのだろつか、彼女は。

封筒とか言っていたが、まさか愛の手紙だろか。

さっきのやり取りでも愛してくれるなんてポイント高いなあ。

まあそんなことはないのは知ってます。

なら果たし状か？

とりあえず自分の机（黒板から見て横6列、縦7列ある。僕の机は横3列目の縦1列目という教卓前のポジション）から彼女の言う封筒を取るべく近付く。

とその時、黒板の張り紙の文字が目に入り苦笑い。

『席替え表』

入学式から変わっていなかった席をタイミング良く変えたらしい。

黒板から見て横1列目の縦6列目という、日当たり良好で寝心地最高の窓側の席だった。

ドジっ娘属性なんだな彼女は。

強制イベントだったが回避可能な設定とは嬉しいことだ。

ありがたく回避させていただきます。

さようなら。

新席に座りお昼寝の準備をする。

では、おやすみなさい。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - B（後書き）

Q ・この後どうなるの？

A ・さあ？

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - C (前書き)

話は全然進まないよ。

主人公の妄想とクラスの女子との高密度な掛け算のお話。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン Part・C

数十分後、授業終了のチャイムが校舎に響き渡り、汗だくの男子だけが教室に戻ってくる。

『男子に更衣室なんてあると思ったの？バカなの？アホなの？』

と体育の最初の授業で体育教師が言ったとか言っていないとか……。

ホントは、『女子は女子更衣室で着替えて、男子は男子更衣室という名のこの教室で着替えてグラウンドに集合』が正解。

中学校でもそうだったし、むしろ男子更衣室のある学校の方が珍しいのでは？

男子たちが着替えを始め、鞆からスプレー缶やら液体が入った小瓶を取り出し吹きかけ始める。

それを見て僕は窓を全開に開け放つ。

窓側の席になってしまったのだし、空気の入れ替えを目的とした窓開け係を買って出ようではないか。

この男臭くて香料剤臭い淀んだ空気を4月終わりの爽やかで涼やかな澄んだ空気に入れ替えようではないか。

主に僕のところだけの空気の入れ替えを目的だけど。

てか臭いから有無を言わず開け放つけどね。

「おお、瀬兎ありがてえ。涼しい」「こっちも開けようぜ」と感謝されたり、賛同者が出たり。

自分のためにしたことが皆のためにしたことになった。

クラスでの評価が上がった→

ある種のゲームならこんな表示がされていそうだ。

それを見ていたその手のゲームのヒロイン6人の内の1人（同じクラスの委員長。成績優秀。文武両道。明るくハキハキとしているが重度の男性嫌いである。そのため百合の噂も……。だがそれがいい！！ 参照：付属説明書）の評価も上がりそうだ。

などくだらない妄想の世界に休み時間と2時間目、3時間目を費やすというダメな方に優等生。

そして現在、4時間目の数学の授業中。

クラス委員長ルート、エンディングの間近の妄想中である。

中学時代に恋愛で裏切られ、ひどく傷付き男嫌いになってしまった彼女。

主人公（僕）に恋をしていることに気付きながらも否定し続ける。

『あいつは男だ。また裏切られる。傷つくのは嫌だ』と思い主人公（僕）との距離を取り始める。

そんな彼女の手を無理やり引いて学校を抜け出す主人公（僕）。

街を一望できる主人公（僕）お気に入りスポットで夕焼けをバックに抱きしめての愛の告白。

彼女も否定していた恋心を素直に受け止める。

最後はハッピーウェディングという名のハッピーエンドに――。

自分の脳内に大人になった彼女のウェディングドレス姿のスペシャルギャラリーを追加。

ブラボー！おおブラボー！！

過去の中でも結構上位に食い込むんじゃないかな的な仕上がりだった委員長。

しかしこの脳内恋愛シュミレーションゲームはまだ5人のヒロインがいる。

委員長のハッピーエンドの余韻を残しつつも、今日中に2人目のヒロインを攻略するべく現金にも次のルートを選択中。

3年生の幼馴染が、中学時代の部活の後輩（中学3年生）か……――ハッ！？

数学の授業中にルート（✓）選択とか地味にダジャレが出来てるところに気付いてニヤニヤしてしまった。

ニヤニヤしたアホ面をしながらヒロインを選んでいると4時間目終了のチャイムであり昼休み突入のチャイムが校内に鳴り響いた。

ルート選択はあとで考えるとして、心のメモリーカード（8MB）

にセーブ。

机に一応広げていた教科書やノートを片づけて弁当を鞆から取り出す。

鞆から、取り出す。

鞆から……取り出す。

鞆から……取り出せない。

（しまったー。母さんは旅行で弁当作れないからコンビニで買ってこなきゃいけないんだった！）

この私立城西学園には学食はない。
しりつじょうせいがくえん

が、街のパン屋さん2店舗からパンをお取り寄せ販売している購買がある。

売れ残ることなど絶無といっていいほどに大好評で、昼休みと同時に開店し10分後には無くなるという大盛況である。

そして現在。

昼休みに入ってからすでに4分経過している。

急げばなんとかなるかもしれない！

ダッシュで購買に行けば、行け、行………行けない。

何故なら僕の目の前を名前も知らない女子が僕を見て立ち塞がっているからである。

「はい、これ。私の机に瀬兔君宛ての手紙が入ってたよ」

「あ、ありがとう」

見覚えのない封筒を受け取り、見てみると封筒前面に『瀬兔無月へ』とデカデカと書かれていた。

「むふふー、ラブレターかい？瀬兔君やるねー」

「いやこれをラブレターというのは無理があるんじゃないかな」

「いやいや、私には分かるよ。この封筒からはラヴの匂いがプンプンするよ」

クンクンと匂いを嗅ぐしぐさをする女子。

あどけない顔立ちと行動をする女子からはいい匂いがして僕の鼻孔

良かった。

なんとか誤解が解けた。

時間が解決してくれるものだね。

「瀬兎君が先生に無理やり攻められてるとこ妄想してたのに。残念」

「僕が受けかよ！普通に考えて攻めだろ！」

何気に爆弾発言してますよ、この子。

「……弱気攻め？」

「命令させねえから！ガンガンいくから！」

「攻められてガンガンイツちゃうんだね」

「そういう意味じゃねえから！」

「ガンガン攻められてイツちゃうんだね」

「結局的に僕が攻められてるじゃないか！しかも強気に」

「先生のまじんのかなづちでいつもクリティカルヒットするある意味運のいい瀬兎君『らめ、先生そこ、そこ、ぼ、僕、弱い「僕と先生で妄想始めないで、お願いだから！」先生のまじんのかなづちでもう僕、もう、僕イツ、イツちゃう「やめてください」ーっ！』みたいな」

「汚されちゃったよ、僕……」

——こんな感じで掛け算と会話のやり取りを5時間目の始まりまで繰り返した。

彼女とは掛け算の趣味が合わないようだった。

会話はなかなか楽しめたけど。

だが彼女が誰なのかは分からずじまい。

まあそれは時間が解決してくれるけどね。

同じクラスだし。

しかし昼飯にありつけないという最悪の事態を引き起こしてしまった。

腹減った！。

『話がある。』

昼休みに職員棟3階の最奥の教室に来るべし。』

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - C (後書き)

Q ・展開遅くない？

A ・え？ああ、うん。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - D (前書き)

ようやくヒロイン(?)と接触。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン Part-D

「話がある。昼休みに職員棟3階の最奥の教室に来るべし。か……」
5時間目の現代国語の授業中に封筒を開封。

半紙全面を使ってデカデカと書かれた文章。

字面は毛筆で達筆に書かれて果たし状に近く、文章は簡潔的に書かれて指令に近い。

残念ながらその果たし状のような指令は女子との楽しい会話によって守れなかったわけで。

ここまで来るとあの女子——僕の妄想の中のヒロインに胸以外そっくりな女子が可哀想になってきた。

僕が寝坊したことにより僕に見つかる。

封筒を入れたが席替えによって僕の席じゃない席に入れ間違える。

僕がそれを無視する。

入れ間違えた席の住人が昼休みに気付き僕に渡す。

席の住人と僕が話しこみ封筒を開けたのが5時間目。

呼び出し時間設定が昼休み。

やることなすこと、全てにおいて、ことごとく、タイミングも、間も、何もかもうまくいっていない。

半分僕のせいであったとしても可哀想なほどにうまくいっていない。放課後じゃ遅いかもしれないけれど指定された場所に行ってみるか。本心では関わりたくないのは今も変わらない。

しかし僕に関する全てがうまくいかないのは、僕自身おもしろくない。

あの女子がそう感じている、感じていないは関係なく。

僕が、おもしろくないから、放課後に、行動する。

それでいい。

それだけでいい。

時間は15時を少し過ぎ、場所は職員棟3階の最奥の教室。昼休みに指定された教室の目の前である。

正確性を重視するならば、教室ではなく部室である。

指定された部室のドアには強調性の塊でしかない文字が書かれた張り紙が貼ってあった。

「十二支部……。本部は？第一支部から十一支部までどこにあるの？ってか組織ですか！？」

意味不明。

本当に分らない。

てつきり部活勧誘だと思ったから気楽に来たのに——本音では。

『おもしろくないから行動する』って、僕はそんなにアグレッシブではない。

指定された場所が文化部の部室しか存在しない階で、勧誘なら拒否してあの女子とは今後一切関わらないようにしたかっただけ。

それだけだったのに……。

「はあ。うまくいかないのは僕も一緒かな。本当に知りたくねー」
テンション、ガタ落ちだ。

いつまでもウダウダしてても時間の無駄だし、さっさと済まそう。

あれ、意外とアグレッシブじゃね？僕。

十二支部と書かれた張り紙部分をノックする。

へんじがない。ただのむじんのようだ。

朝も同じネタを使った気がするがスルーするとするか。

微妙に言いづらい言葉を思いながら、なんとなく、本当になんとなく、ドアノブに手を掛けて、開けてしまった。

むしろ開いてしまった。

部室内はやはり無人だった。

しかし空き部室というわけではなく使用感があった。

部室だから使用感と表現したが言葉を変えるなら生活感。

Uの字にソファが並べられており、中央には座った際に膝ぐらいの

高さのテーブル、その上に菓子類（食べかけ）。

職員室に良くある上はファイル置き場、下が収納場所のアルミ製の棚が2つ。

上のファイル置き場には単行本や文庫本、漫画、小物が置かれている。

パソコンに携帯ゲーム機と、私物であろうものがちらほらと本当に生活感のある部屋だった。

ここで暮せと言われれば、余裕で暮せる。

部屋内はとてもキレイに掃除されている。

が、物が出しっぱなしで片付けはされていない。

これも生活感が感じられる要因の一つ。

「僕自身の部屋を見ているようで心が痛いぞ、ここ」

僕も使ったものは元の場所に戻すのをよく忘れるタイプであり、僕自身の部屋がこうだから。

しかしそんな僕の部屋とは違う、1点だけ許せない汚い部分がある。元ファイル置き場だった現本棚である。

小物が置かれていることは許す。

スペースの有効活用だし、本が増えていくならいつかは排除されるものである。

でも、だ。

背の高さ無視に散りばめられて、さらには漫画に挟まれる外国文学、あるうことか巻数の順番までも狂いに狂っているこの本棚だけは断じて許せない！

背の高さとジャンル別は許します。100歩譲って許す。

この2つは趣味趣向の嗜好と思考が存在するから許せる。しかーし！

巻数は別だッ！！

これは趣味も思考もクソもへったくれもないッ！

ただただ書かれた巻数順に並べるだけでありそれ以外の並べ方は存在しない唯一無二の絶対的な方法であり法則ッ！

ここが自室なら42・195?の歩数譲って許すとしても、ここは部室という他に人がいる公共の場所であり次に読む人に迷惑っ!

「ああー次が早く読みたいなー」なんて心わくわくさん状態で本棚に向かったら「あれ?どこ?どこ?」ってなったら嫌だろ!

作品に対する熱が0・1でも冷めたらどうしてくれるんだ!

この並び方を許している部活メンバーもメンバーだ!

誰1人としてこの並び方に疑問を持たないのか!?

ああ、もう!「限界」だッ!直すねッ!

右本棚に漫画、左本棚に活字系を配置。

漫画は少女・少年・大人という順に出版社別の作者順に並べる。

活字系は文庫・新書・単行本の順に高さを揃える。

文庫・単行本は日本文学の次に外国文学を置き作者順の出版社のあいいうえおで並べる。

新書は出版社別の著者のあいいうえおで並べる。

この形が基本形(僕の中で)。

「ぐちゃぐちゃの本棚なんて本棚とは呼ばない。整理されてこそ本棚だ。」

「そーですね。あーはいはい、おつかれさまー」

「へっ?」

あの女子がソファでくつろぎながら本棚整理のねぎらいの言葉をくれた。

いつからいたんだ?

本棚整理に夢中になりすぎて気づかなかった。

「とりあえず座りなよ。あつ、お菓子食べてもいいから」

「えっ、あつ、どうも」

彼女に促されるままに対面する形でソファに座り、彼女が食べてるポテチを1枚食べる。

「で、昼休みにしていた約束を無視したくせにこの部室に何の御用ですか」

少し棘がある感じの敬語混じりの言葉が心に刺さる。

「約束をした覚えはない。そもそも封筒の中を見たのが5時間目で昼休みが終わってからだったんだよ」

「1時間目に封筒渡したのになんで5時間目に読んでんの？モテない男子が女子からお手紙貰ったら即開封でしょ？ラブレターかもしれないじゃん」

「僕がモテないのは知ってるからいいけど、あんな怪しい封筒は開けてもらえただけで良しとしなさい。そしてラブレターならもっと可愛いのを使っらしいぞ」

「そんなことはどうでもいいの。なんで5時間目に読んでんのか聞いているんだけど」

僕がモテないことはそんなことなんだ。

「あー、えーとだな、そのー、なんだ……まあ、なんやかんやあつて読めなかった」

「なんやかんやが1番大事なんでしょうが。そこをはしよるな！」説明を求められるのはなんとなく察しがついていたので演技に入る。

「うーん……じゃあ、言うけどさ」

ちよつとためらっているように1拍分の間を作る。

そしてまるで観念したような、渋々と承諾したような決意の言葉を紡ぐ。

次にここで1拍分の間を作ること忘れず緊迫感を作り出し、嘘と真を混ぜた言葉を一気に発する。

「まず最初に僕のクラスは今日の朝に席替えをしました。君が僕の机と勘違いしてクラスの女子の机に封筒を入れました。名前と顔が一致しないクラスの女子の机を勝手に漁ることはできません。その女子に僕宛の封筒が机に入っていることを伝えてもよかったけれど僕は『モテない男子』なので女子に話しかける勇気もなく向こうから来るまで僕は待ちました。そしてその女子が封筒に気付いて僕に封筒を渡したのが昼休みが終わる直前でした。結果、僕が封筒を開けることが出来たのは5時間目になってしまいました。女子に話し

かける勇気がなかった点は僕が悪いです。だが僕は謝らない。なぜなら僕に非はないからです。僕が5時間目に読むことになったのも僕がヘタレ系モテない男子と再確認させられたのも君が封筒を別の人の机に入れたのが原因だからです。説明終わり。これでいい？」

「……」
固まってる。

その少年、主人公&その少女、ヒロイン P a r t - D (後書き)

次はどうしようかな(棒)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0468p/>

干支&瀬兎ら

2011年10月7日05時26分発行